

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同研究課題「日琉語族内的声調類型論の再構築」

2022 年度第 3 回研究会（通算第 7 回目）報告書

日時：2022 年 11 月 23 日（水）10:30～16:30

場所：Zoom によるオンライン開催

使用言語：日本語

共催：基幹研究「アジア・アフリカの言語動態の記述と記録：アジア・アフリカに生きる人々の言語・文化への深い理解を目指して（DDDLing）」

プログラム：

10:30-12:00 中澤光平（AA 研共同研究員，信州大学）
京阪系アクセントにおける式音調の音声変種

13:30-15:00 平子達也（AA 研共同研究員，南山大学）
浜松市村櫛方言のアクセントについて

15:30-16:30 全員
全体討議

報告者：青井隼人（AA 研共同研究員，東京外国語大学）

2022 年度第 3 回研究会では 2 件の研究発表があった。中澤氏の発表は、日本語族の声調体系の中でももっとも複雑である京阪系の方言を対象とした発表である。京阪系の方言は、いわゆる「式と核」を併せ持つ多型アクセント体系とされる。本発表では、式の音調の地理的変異に注目し、従来の記述・議論を整理した。平子氏の発表では、静岡県浜松市村櫛方言のアクセント（声調）が取り上げられた。当該方言は、一見すると、下げ核の位置と有無が弁別的な多型アクセントであるが、全ての型が安定的かつ均等に現れるわけではない。言い換えると、核の位置の交替が観察されたり、特定の型が欠けていたりする。本発表では、フットを導入した分析が可能かどうか、浜名湖周辺方言に生じたアクセント変化をどのように再建できるか、などが議論された。

中澤光平「京阪系アクセントにおける式音調の音声変種」

発表要旨

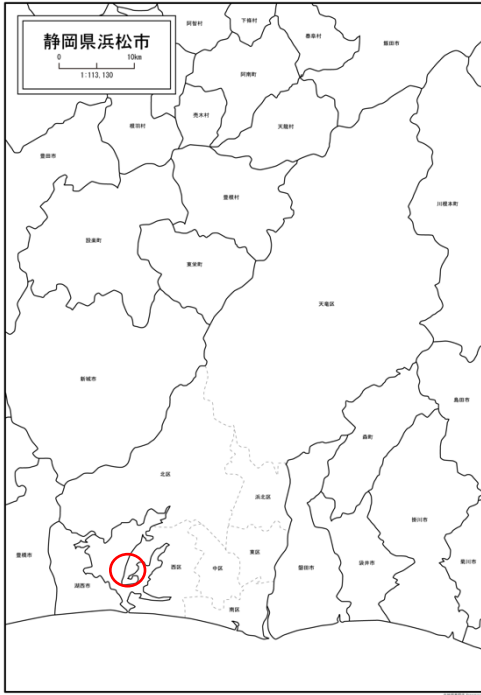
京阪系アクセントは式と（下げ）核からなる体系だが，式の音調には様々な変種があることが知られている。本発表では，京阪系アクセントの式の音声変種について，特に低起式を中心に，発表者の調査データを基に記述し，次の点を考察した。

- (1) 式は単なる高さ（register）の特徴ではなく，向き（inclination）も重要な要素である。
- (2) （くぼみ式などを除く）低起式の音声変種にも，（大幅な）上昇の位置以外にその後の向き（上昇，平進）の違いもある。基本的には（大幅な）上昇位置と連動しているが，低起（早上がり）平進式，低起（早上がり）上昇式のように，向きと高さの組み合わせで表現することが望ましい。

浜松市村櫛（むらくし）方言のアクセントについて

平子達也（AA研共同研究員，南山大学）

1 はじめに



- 対象方言：静岡県浜松市西区村櫛町方言
（以下，村櫛方言）
- 調査協力者：IK氏（昭和15年生・男性／故人）
FH氏（昭和15年生・女性）
- 調査年月日：2015年9月11-12日
2016年3月10, 25日
- 調査語彙：1 拍名詞 47語
2 拍名詞 487語
3 拍名詞 416語（複合語含む）
4 拍名詞 502語（複合語含む）
5 拍名詞 302語（主に複合語）
6 拍名詞 146語（主に複合語）
7 拍名詞 60語（主に複合語）
8 拍名詞 24語（主に複合語）
- 合計 1984語

2 先行研究

2.1 山口（1963）・寺田（1970） cf. 上野善道（1984: 59-60）【○はモーラ，▷は一モーラ助詞】

- 舞阪方言：2 モーラ語 /○¹○/ ~ /○○¹▷/
3 モーラ語 /○○¹○/
/○○○¹/ (; /○¹○○/)
4 モーラ語 /○○○¹○/ ~ /○○○○¹▷/
5 モーラ語 /○○○+○¹○/ ~ ○/○○+○○¹▷/
/○○+○○¹○/
- 新居方言：2 モーラ語 /○○¹/ ~ /○○¹▷/
3 モーラ語 /○○¹○/
4 モーラ語 /○○○○¹/ ~ /○○○○¹▷/
5 モーラ語 /○○○+○○¹/ ~ /○○○+○○¹▷/
/○○+○○¹○/

2.2 Poppe（2016）

舞阪方言に関するフットを使った分析

3 アクセント型の整理：下げ核の有無と位置が弁別的な体系

村櫛方言：2モーラ語 /O¹O/ ~ /OO¹▷/ (3, 4, 5 類)

/O¹O/

/OO/ (1, 2 類)

*/OO¹/

3モーラ語 /O¹OO/ ~ /OO¹O▷/

/O¹OO/

/OO¹O/

/OOO¹/ (4 類)

/OOO/ (1, 2 類と 6 類)

4モーラ語 /OOO¹O/ ~ /OOOO¹▷/

/O¹OOO/

/OO¹OO/

/OOO¹O/

/OOOO/

*/OOOO¹/

5モーラ語 /OOOO+O¹O/

/OO+O¹OO/ ~ /OO+OO¹O▷/

6モーラ語 /OOOO+O¹O/

/OOOO+O¹OO/ ~ /OOOO+OO¹O▷/

4 核の交替が見られるものと見られないもの (3拍語のみ)

(i) 3モーラ語：/O¹OO/ ~ /OO¹O▷/ と /O¹OO/ と /OO¹O/

(a) /O¹OO/ ~ /OO¹O▷/：制限なし？

欠伸 (アクビ) ; 朝日 (アサヒ) ; 辺り (アタリ) ; 嵐 (アラシ) ; 鰻 (アワビ) ; 哀れ (アワレ) ; 泉 (イズミ) ; 苺 (イチゴ) ; 従兄弟 (イトコ) ; 命 (イノチ) ; 兜 (カブト) ; 鰯 (カレイ) ; 棠螺 (サザエ) ; 姿 (スガタ) ; 住居 (スマイ) ; 棲処 (スミカ) ; 李 (スモモ) ; 長さ (ナガサ) ; 情け (ナサケ) ; 茄子 (ナスビ) ; 涙 (ナミダ) ; 広さ (ヒロサ) ; 蛍 (ホタル) ; 臉 (マブタ) ; 緑 (ミドリ) ; 南 (ミナミ) ; 紅葉 (モミジ) ; 社 (ヤシロ) ; 病 (ヤマイ) ; 山葵 (ワサビ) ; 蕨 (ワラビ)

(b) /O¹OO/：2モーラ目が弱のものが多い？

主 (アルジ) ; 翁 (オキナ) ; 親子 (オヤコ) ; 蚕 (カイコ) ; 神楽 (カグラ) ; 辛子 (カラシ) ; 烏 (カラス) ; かるた (カルタ) ; 胡瓜 (キューリ) ; 椿 (ツバキ) ; 錦 (ニシキ) ; 二十歳 (ハタチ) ; 坊主 (ボーズ)

※FH氏は「親子 (オヤコ)」「辛子 (カラシ)」は/OO¹O/, 「椿 (ツバキ)」は/O¹OO/ ~ /OO¹O▷/。「烏 (カラス)」「二十歳 (ハタチ)」は未調査。

(c) /○○¹○/ : 2 モーラ目が非弱のものが多い？

胡座 (アグラ) ; 貴方 (アナタ) ; 裕 (アワセ) ; 五つ (イツツ) ; 暇 (イトマ) ; 後ろ (ウシロ) ; 項 (ウナジ) ; 笑窪 (エクボ) ; 思い (オモイ) ; 家族 (カゾク) ; 薬 (クスリ) ; ご飯 (ゴハン) ; 境 (サカイ) ; 定め (サダメ) ; 砂糖 (サトウ) ; 磁石 (ジシヤク) ; 狸 (タヌキ) ; 頼り (タヨリ) ; 便り (タヨリ) ; 千鳥 (チドリ) ; 七つ (ナナツ) ; 斜 (ナナメ) ; 匂い (ニオイ) ; 鰯 (ニシン) ; 荷物 (ニモツ) ; 願い (ネガイ) ; 東 (ヒガシ) ; 単衣 (ヒトエ) ; 一つ (ヒトツ) ; 一人 (ヒトリ) ; 火箸 (ヒバシ) ; 二重 (フタエ) ; ブラシ ; 炎 (ホノオ) ; みかん ; 御輿 (ミコシ) ; 盲 (メクラ) ; 若芽 (ワカメ)

※「後ろ」は/○○○¹/もあり。

5. 歴史変化

- (1ab)の語は周辺の外輪式アクセント方言 (浜松市東部・愛知県新城市) で概ね/○¹○○/
- (1c)の語は周辺の外輪式アクセント方言で概ね/○¹○○/と/○○¹○/に分かれる (浜松市東部には/○○○¹/もあり)
- 以下のような変化を想定 : 地域差は歴史変化の各段階を反映？

(2) 浜名湖周辺方言におけるアクセント変化 (の一部)

	村櫛		舞阪		新居
*/○ ¹ ○○/	> /○○○ ¹ / ~ /○○ ¹ ○▷/ (1a)	>	/○○ ¹ ○/	=	/○○ ¹ ○/
	(核の後退)		(核の固定)		
	> /○○ ¹ ○/ (1c の 1 部)	=	/○○ ¹ ○/	=	/○○ ¹ ○/
	(核の後退)				
	= /○ ¹ ○○/ (1b)	>	/○○ ¹ ○/	=	/○○ ¹ ○/
			(核の後退)		
*/○○ ¹ ○/	= /○○ ¹ ○/ (1c の 1 部)	=	/○○ ¹ ○/	=	/○○ ¹ ○/
*/○○○ ¹ /	= /○○○ ¹ /	=	/○○○ ¹ /	>	/○○ ¹ ○/
					(語末核回避)

6 今後の課題

- 共時的体系の分析
 - 村櫛方言のアクセントも舞阪方言と同様にフットを使って分析できるか
 - 形態素境界も考慮に入れる必要がある
- 舞阪方言のフットが有意味な体系ができた過程について
 - 周辺の外輪式アクセントとの歴史的関係も含めて
- 音響分析 (定量的分析)
 - 下り目位置が聴覚印象的に「揺れる」

参考文献

- 上野善道 (1984) 「地方アクセントの研究のために」加藤正信編『新しい方言研究』（『国文学解
釈と鑑賞』49/7 臨時増刊号）:47-64.
- 寺田泰政 (1970) 『遠州方言のアクセント』美哉堂書店.
- Poppe, Clemens (2016) "Iambic Feet in Japanese: Evidence from the Maisaka Dialect," 『言語研究』150: 117-135.
- 山口幸洋 (1963) 「静岡県春野町方言のアクセントにみられる「くぎりの下降」について」『音声
の研究』10: 8-10.